

西ヨーロッパ型農業経済両立発展 ～要因とアジアに適用可能かの考察～

外国語学部英語学科 3年

A 0051112 木本香織

はじめに

東アジアの国々は「東アジアの奇跡」と呼ばれる高度経済成長を 1960 年代から 1990 年代にかけて実現させた。しかしこれらの国で共通して起こったのが農業の衰退そして食料輸入の増大である。比較優位の高い製品産業により重点をおくことになったため農業よりも工業成長を優先する政策を国家もとるようになった。この時期に忘れ去られていた農業は現在消滅の危機に直面していて、近年では年々に減少しつつある食料自給率の低さ、また輸入食料の安全性と言う面などの問題から再び農業の重要性が見なおされている。東アジアでは経済発展による工業化が農業の衰退を招くのは当然であるというような考えが普及しているが、これはすべての国に当てはまるわけではない。西ヨーロッパ国々では農業と経済両方を同時発展させるということを成し遂げた。この論文のなかでは西ヨーロッパの食料自給率を維持したままの経済発展の要因分析をし、またそのモデルが現在の東アジア、および今後発展が予測されるアジア諸国への応用が可能であるかを考察したい。

西ヨーロッパの食料自給率を維持したままの経済発展要因の分析においては日本との比較をおこない、直接的要因(実際に取られた政策や農業の動き)、国民の農業に対する意識、そして歴史的な要因などから調べていく。

結論

西ヨーロッパのような内発的な農業経営展開は市民革命からの農民の発展力が大きくかわっているので、政府による上からの民主主義を達成したアジアの農民達がすぐに内発的な発展力を身につけ、それを使用するというのは難しい。しかし農民達が自ら組織化することにより、政府に働きかける力を持つことによっても内発的な発展力は形成することは可能なのではないかと考える。また西ヨーロッパ型の農業構造改革や、政策はヨーロッパ人の歴史そしてヨーロッパの風土、また能力にあったものであるので直接アジア諸国が応用できるものではない。アジアにはアジアの風土、そして現在の経済発展段階にあった農業発展を考察することが必要である。

主要参考文献

農林水産省『平成13年度農業白書』<http://www.maff.go.jp/www/hakusyo/hakusyo.html>

『ジュニア食料・農業・農村白書』http://www.maff.go.jp/www/hakusho/kodomo_hakusyo.html

笛木昭著『経済発展と食料・農業・土地 欧米、アジア・日本の比較研究』農林統計協会、2000年。

堀越広一著『世界のリブレット21 中世ヨーロッパの農村世界』山川出版者、2000年。

ブライアン・ガードナー著『ヨーロッパの農業政策』筑波書房、1998年。

フレドリック・ドリュージュ著『ヨーロッパの歴史 欧州共通教科書』東京書籍、1998年。

「NIRA 研究報告書 食料・農業分野における東アジア諸国の連帯に関する研究」総合研究開発機構、2001年。